

[平成17年度普及に移す技術]

[普及に移す技術名] 夏休みに収穫できるモモ中生、晩生品種の特性

[要約] モモ中生品種の「あかつき」、「山根白桃」、「川中島白桃」、晩生品種「ゆうぞら」の各品種は果実品質、収量も安定しており、県内での適応性は高く、これらの品種を導入することにより7月中下旬から8月下旬までモモの出荷が可能となる。

[キーワード] モモ、品種特性、

[担当] 福井農試・園芸・バイテク部・果樹研究グループ

[連絡先] 0776-54-5100 j-yamamoto-ae@pref.fukui.lg.jp

[分類] 参考

[背景・ねらい]

モモは消費者に人気の高い果物であるが、県内の栽培面積は7ha程度である。一方、地産地消の中で果物の生産が求められているものの、地域の果物は少ない。そこで、早期結実性の高いモモについて、全国的な主要品種の本県における栽培適応性を明らかにする。

[技術の内容・特徴]

1. 幼木期の樹特性は「あかつき」で直立性が強いが、「山根白桃」、「川中島白桃」、「ゆうぞら」はやや弱い(表1)。
2. 開花期は、開花始期が4/5~7、開花盛期が4/10~12、開花終期が4/13~14であり、4品種ともほぼ同じ時期に開花し、結実も良好である(表1)。
3. 各品種の収穫期は「あかつき」7/23~7/30、「山根白桃」8/8~8/14、「川中島白桃」8/10~8/17、「ゆうぞら」8/17~8/23であり、4品種で8月上旬を除き7月中下旬から8月下旬まで継続して出荷できる。各品種の果重は230g以上あり、糖度は「あかつき」で12.8度であるが、他の品種では14度を超え。渋みも無く、果実品質は良い(表2)。
4. 各品種とも植付2年目には初結実し、3年目には植栽全樹で収穫可能である。8年生の10a当り収量は「山根白桃」で900kg、「あかつき」「ゆうぞら」で約1,000kg、「川中島白桃」で1,500kgである(図1)。

[技術の活用面・留意点]

1. 無花粉品種の「川中島白桃」を植栽する場合は必ず有花粉品種を混植する。
2. 各品種とも結実性は極めて良く、開花前に摘蕾を実施し、大果生産、摘果労力の省力化を図る。
3. 各品種とも夜蛾被害・灰星病発生防止のため、袋かけ(5月下旬)が必要である。
4. 樹を健全に育成するためには縮葉病の休眠期防除が重要であり、定植後から防除を実施する(表3)。
5. 「山根白桃」は年により裂果が若干発生する。「川中島白桃」は収穫遅れになると、果肉障害が発生する。「ゆうぞら」は生育期間が長いため、灰星病の防除が重要である。

[具体的データ]

表1 各品種の樹特性と開花期

品種名	樹姿	樹勢	花芽の 多少	花粉の 有無	開花期*		
					始	盛	終
あかつき	直	強	多	有	4/5	4/10	4/13
山根白桃	丫丫直	中	多	有	4/7	4/11	4/13
川中島白桃	丫丫直	強	多	無	4/7	4/12	4/13
ゆうぞら	丫丫直	中	多	有	4/7	4/11	4/14

* : 平均値 (2000 ~ 2004年)

表2 各品種の収穫期と果実特性

品種名	収穫期*		果重*	横径**	糖度*
	始期	終期			
あかつき	7/23	7/30	235	92	12.8
山根白桃	8/8	8/14	263	92	14.5
川中島白桃	8/10	8/17	266	84	14.9
ゆうぞら	8/17	8/23	232	81	14.2

* : 平均値 (2000 ~ 2004年)、* * : 2004年

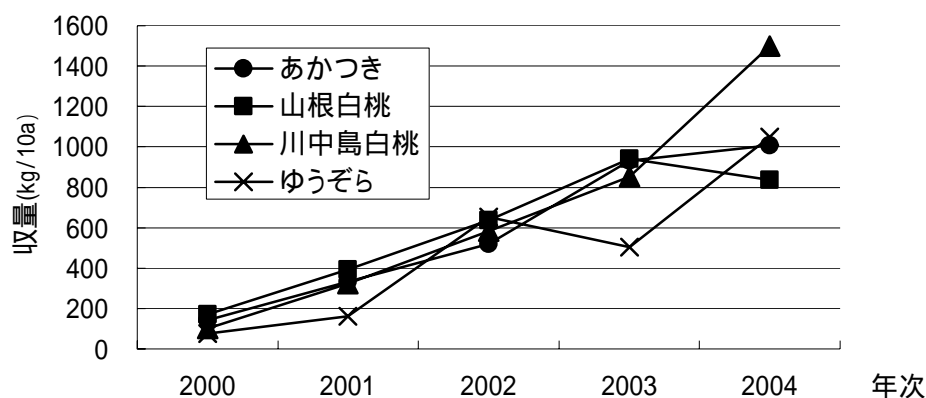


図1 各品種の収量の推移 (植栽距離6m x 6m, 1997秋植)

表3 参考防除事例 (2004)

散布日	対象病害虫	散布薬剤
3/17	縮葉病	石灰硫黄合剤
3/29	縮葉病	バルノックス水和剤
4/16	灰星病・せん孔細菌病・アブラムシ類	ロブラル水和剤・アグリマイシン100・アディオフロアブル
5/6	黒星病・アブラムシ類	バイオール水和剤・スカウトフロアブル
5/21	黒星病・灰星病・シンクイムシ類	ヘルコート水和剤・モスピラン水溶剤
6/2	黒星病・灰星病・シンクイムシ類	トリフミン水和剤・スカウトフロアブル
6/24	黒星病・灰星病・シンクイムシ類	トップジンM水和剤・アディオフロアブル
7/8	黒星病・灰星病・シンクイムシ類	ヘルコート水和剤・スカウトフロアブル
8/2	ホモブシス腐敗病・シンクイムシ類	ヘルコート水和剤・スカウトフロアブル